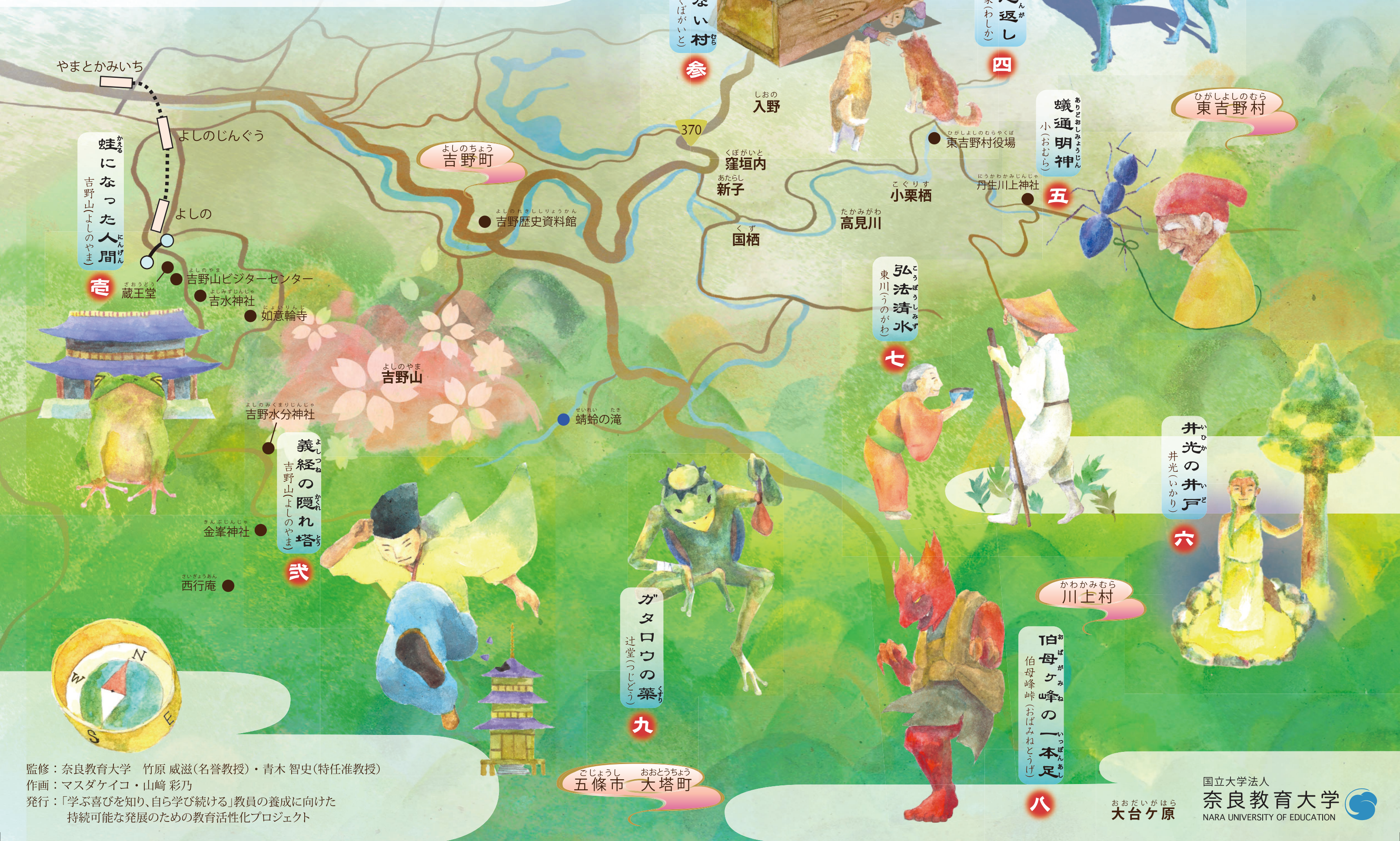


吉野民話地図

YOSHINO FOLKTALES WALKING MAP ©2013

なげいし たき
● 投石の滝



監修：奈良教育大学 竹原 威滋(名誉教授)・青木 智史(特任准教授)
 作画：マスタケイコ・山崎 彩乃
 発行：「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた
 持続可能な発展のための教育活性化プロジェクト

国立大学法人
 奈良教育大学
 NARA UNIVERSITY OF EDUCATION

地図の民話スポットで声に出して読もう！

原話資料 (1) 比較民話研究会 櫻井龍彦代表編著『奈良県吉野町民間話話報告書』、(2) (2) 比較民話研究会 竹原威滋・丸山顯徳 共編『東吉野の民話』、(3) 比較民話研究会 谷垣伊太雄・横山浩子 共編「奈良県吉野町・国栖の昔話（上）」、(4) 比較民話研究会編「奈良県吉野郡大塔村の昔話（下）」、(5) 高田 十郎編『大和の伝説』 村上 郁

再話

蛙になった人間



資料(1)

大峰山では、五月三日の山開きから九月二十三日までの間に、よかけの人がお参りに行くねんで。冬は雪が多いから行かへん。夏場だけや。大峰山の参道は険しいて、奥へ行くほどだんだん険しなっていく。ある人が、あんまりしんどいから、「こんな険しいところで話聞いて拝んでも、別に御利益ない」いうて、ほかのお参りしてた人にまで、いろいろ嫌がらせを言ったんや。そしたらその人、バチが当たったんか、覗きの崖から、足滑らして落ちてしもってん。運の良いことに、その人は死ななかつた。けど、今のようにはリコプターも何もない時分やから、助けに行くにも行かへん。そこで、お坊さんが集まって相談して、その人に、「助けて欲しければ、蛙の姿にして、助けてやろう。それで真人間になるか」いわはってん。その人が、「真人間になります」いうたので、お坊さんらは、その人を蛙の姿に変えてん。その人は、蛙の姿でびよんびよんと崖をよじ登って助かったんや。お坊さんらは、蛙を蔵王堂に連れて行くと、「人間の姿に戻るには、かなりの修行をせんならん」いうて、みんなで、とうとうとお経を上げてん。吉野じゅうのお坊さんが全部寄って拝んで、おかげで蛙は人間に戻り、真人間に生まれ変わったそや。その時から、蔵王堂では、七月七日に「蛙跳び」の行事が行われるようになったいうことや。

義経の隠れ塔



資料(1)

源義経は頼朝の弟で、はじめは兄弟仲がよかつてんて。けど、義経の勢いがあんまり強かつたので、頼朝が、「これはつかうか」としたら、自分もやられるかも分からん」と思うようになってん。それでとうとう、義経は頼朝に追われる身になってしもってん。義経は、吉野山まで逃げて来て、吉水神社に逃げこんでん。そこへ蔵王堂の横川寛範いう坊さんが攻めて来たんや。義経は、佐藤忠信に助けられて、弁慶といっしょに奥千本のほうまで逃げてん。そこに、役行者が行場として作った塔があったから、ふたりはその中に逃げこんだんや。それで、その塔のことを隠れ塔と呼ぶようになってん。ところが、敵が塔のまわりを取り巻いて攻め立てるので、こんどは塔を蹴破って逃げてん。そこから蹴破りの塔ともいわれてる。そのあと、安宅の関を越えて平泉まで逃げていったんやな。義経の隠れ塔は行場やから、今でも大峰山にお参りする人は塔に入って行するねん。吉野なる 梁山の奥の隠れ塔 本来、空の 住みかなりけり オン アビラ ウンケン ソワカ いうのを三回お唱えしてお祈りするねんで。

犬を飼わない村



資料(3)

むかし、大海人皇子が友友皇子との争いで吉野から窪垣内に逃げてきたときのことや。大海人皇子が婆河原まで来たら、おじいさんとお婆さんが紙漉の船を洗うておまつりしてはってんて。皇子は、「賊が追ってくるから助けてくれ」て言わはってん。おじいさんとお婆さんは、すぐに船をひっくり返して伏せて、皇子をその中に隠してあげたんや。ほんで、船のうえに糠の粉をお供えしておまつりしててんて。そこへ、賊の二匹の犬が追いかけてきて、鼻をくんくんさせて船のまわりをくるくる回ったんや。お婆さんが、「この犬はいやししい犬や。お供えを食べよと思てはえる」いうて怒ったら、追いついてきた賊が、「そんな行儀の悪いことをしたらあかん」いうて、犬を殺しててん。おかげで皇子は助かったいうことや。それからや、窪垣内では犬を飼わんことになってんて。その犬をまつた大塚いうのが今でも窪垣内の旧国栖小学校の庭にあるねんで。

狼の恩返し



資料(2)

むかしは吉野にも狼がすんどったんやで。ある月夜のこと、狼が村の在所に来てギョオー、ギョオー鳴きよるねん。鳴いて鳴いてしゃあやないもんやよってに、村のもんが何か知らんと思て、出ていって見てん。そしたら狼がえらい苦しうやねん。狼の口をあけてのぞいてみたら、のどに牙が刺さっててんて。たぶん猪を食べてその牙が刺さったんや。村のもんは「そんなんやったら、おまえ、その牙抜いたるさかいにな、噛みも何もすんなよ」て約束さして、牙抜いたったんやでな。狼は喜んで帰って行きよったんや。そしたら、その明くる日、その人の家の前にえらい大きい猪が転がしたあつてんて。「こら、狼が持ってきてくれたにちがいない」て、みなでいうてたんやて。

井光の井戸



資料(1)

むかし、神武天皇が九州から東に向かつて進んできて、吉野山を越えて行かはってんて。そのとちゅう、山の中腹に大きな杉の木があつて、木の根もとに井戸があつてん。神武天皇がその井戸のところを通りかかると、井戸の中からもすこい光がさして来てんて。みながびっくりしてるとな、光の中からしっぽのある人が出てきて、神武天皇の前にひれふしたんやて。神武天皇が、「お前は何ものか」て聞かはったら、その人は、「私は、この吉野山に住む井光というものです。天皇の道案内をしてさしあげようと思つて、お待ち申し上げておりました」ていうねんで。神武天皇は喜んで、井光に道案内してもらて、また東に向かつて行つたいうことや。その井戸は今もあつて、近くに井光山いうお寺と、井光神社いうてちいぢやい祠があるねん。

弘法清水



資料(2)

吉野の川上村の東川は、山の高いところにあるねん。むかしは井戸がのうて、水を汲むのに、下の谷川までおりて行かんらんかつてんて。ある夏の暑い日に、弘法大師さんが旅の途中、東川まできて、ある家に寄らはってん。ほんで、家の外から、「のどが渇いています。どうぞ水をください。」て頼まはってん。すると、お婆さんが出てきて、「ちよっと待つてくさいや。今ここには水がございませんで。ちよっと待つてくさい。」いうて、桶をさげて、下の谷川まで水汲みに行かはってん。ほんで、長いこと経つて帰つてきて、お大師さんに水を差し上げたんや。そしたら、お大師さんは、「汗だらくになって何してくれた。そこまでしてくれたか。よし、それやったら、わたしが、ここへ水が出るようにしてあげよう。」いうと、そこにあつた岩を、金剛杖でトントントンと三べんついて、願をかけはってん。すると、その岩から、冷たい水がこんこんと湧き出てきてんて。それから、村の人たちは、谷川に水を汲みに行かんでも、その泉からおいしい水をいただいて、水で苦労することはなくなつたそや。その泉を弘法清水というて、今もあの高いところで水が湧き上がつてゐるねんで。

伯母ヶ峰の一本足



資料(5)

むかし、伯母ヶ峰に大猪が出て人をとつて食ついうわさやつてん。あるとき、ひとりの侍が、「その大猪、退治したろ」いうて大連れて山の中に入つていつてんて。伯母ヶ峰の奥まで来ると犬がえらい鳴きだしたん。見ると、クマザサがえらい揺れたあねん。そのとき、背中にクマザサがいっぱい生えた猪がだあとかけだしてきて、谷渡つて逃げよつてんて。犬に追いかかれて、追いつめられた猪は牙鳴らして犬に向こうきよった。侍は、ねらい定めて鉄砲を撃つた。猪は弾が当たつて暴れまわりよつたけど、とうとう力尽きて倒れてしもってんて。それから何日かして、紀州の湯の峰温泉に、足を痛めたひとりの野武士が湯治に来てんて。野武士は宿の主人に、「静かなはなれの座敷かしてくれ」いうてん。ほんで、「わしが寝るときは、だれも来たらあかんぞ。のぞいてもいかなぞ」いうねんで。あんまりきつういうもんやから、主人は「おかしいなあ」と思て、夜中にそつとのぞいたんや。ほしたら、寝とつたんは、背中にクマザサが生えた猪やつてん。主人が「あつ」と思たら、そいつ目さましよつた。ほんで、「あれだけ見るないうたのに、見たな。わしは、伯母ヶ峰に棲んでた猪笹王の幽霊や。侍に撃たれて無念でならん。あの侍の犬と鉄砲を手に入れてくれ」いうねん。

主人が犬も鉄砲も手に入れへんかつたら、猪笹王の幽霊は一本足の鬼になつて、伯母ヶ峰を通る人を襲うようになってんて。それからしばらくして、ひとりのお坊さんが伯母ヶ峰にお地藏さんをまつつて、お経を埋めて経塚を作り、鬼を封じ込めたんやて。それで旅人が通れるようになつてん。けどな、お坊さんは、「毎年十二月二十日だけはおまえの好きにせえ」て鬼にいわはってん。そやから「果ての二十日」いうて、この日は伯母ヶ峰の厄日や。この日は伯母ヶ峰通つたら鬼に食われるいうねん。ほんで、その晩に限つて、猪笹王を撃つた鉄砲が、どうもせんのに汗をかくんやて。その鉄砲は天ヶ瀬の祠に納めてあるいうことや。

ガタロウの薬



資料(4)

むかし、辻堂の蒲生の裏にどえらい大きな淵があつたんや。そこに、ガタロウ(河童)があつた。あるとき、お寺の和尚さんが、夜にお便所に行つたら、ガタロウが下から手出してきたんやて。和尚さんはその手を鎌で切つて、ほつといたんやて。次の晩、ガタロウがお寺に来て「手返してくれ」いうねんで。「手返してくれたら、ええ薬やるさかい」いうて。和尚さんは薬とひきかえに手返したつてんて。その薬が錦草や。今でも蒲生屋さんで売つてゐるらしいわ。

蟻通明神



資料(2)

むかし、お殿さんが、「年寄りは飯を食うし、はたらきもない。山に捨ててしまえ」て命令を出さはってん。あるところに、ひとりの息子があつて、親を山に捨てるのはいややというて、家の中に芋穴を掘つて父親を隠したんやと。ほんで、毎日食べ物運んで養つてたんや。あるとき、お殿さんにとりの国から難しい問題を出してきたんや。けど、だれも答えが分かるもんがおらへん。その問題のひとつは、玉に穴がたぐさんあいていて、「この穴に糸を通してみよ」いうことやつた。息子は、芋穴のなかの父親に尋ねてみてん。父親は、「そりや、蟻の足に糸をつけて穴の中に入れて、出口の穴に蜜を塗つていたらええ。蟻は蜜を慕うて行くから、糸がとおる」いうて教えてくれてん。二つめの問題は、四角い木があつて、本と末がわからへんねんけど、「本と末を当ててみい」いうことやつた。父親は、「そりや、水につけたら分かるがな。もとのほうが重たいから、かすかに沈む」いうて教えてくれてん。さいごは、「灰で縄をこしらえてみい」いうことや。父親は、「そりや、なんでもないことや。縄に塩をぬつて焼いたら形が残る」いうた。息子はさつそくお殿さんのとこへ行つて、答えを教えたんやて。お殿さんは喜んで、息子に、「ほうびをやるう」いわはつた。そこで息子は、「じつは、父親を隠して養つています。三つの問題は、みな父親が答えてくれました。どうか、父親が死ぬまでいっしょに暮らせるようにしてください」て頼んだんやて。お殿さんは、年寄りの知恵を認めて、それから、年寄りを山に捨てるいうことをやめにしてんて。この孝行息子をまつつてあるのが蟻通明神やねん。